

為文學者經

三文字屋金平

青空文庫

棚たなから落おちる牡丹餅ぼたもちを待まつ者ものよ、唐からやう様に巧たくみなる三代目さんだいめよ、
 浮木ふぼくをさがす盲目めくらの亀かめよ、人參にんじん呑のんで首縊くびくらんとする白痴漢たはけものよ、
 鰯いわしの頭あたまを信しん心しんするお怜悧連りこうれんよ、雲くもに登のぼるを願ねがふ蚯蚓みずともの輩がらよ、
 水みづに影うつる月つきを奪うばはんとする山猿やまざるよ、無芸無能食むげいむのむよくもたれ総身そうみに智ち
 恵ゑの廻まはりかぬる男をとこよ、木きに縁よつて魚うをを求もとめ草くさを打うつて蛇へびに驚おどろく狼うろたへ狼うろたへ
 者ものよ、白粉おしろいに咽むせて成じやうぶつ仏ぶつせん事ことを願ねがふ艶治郎ゑんぢらうよ、鏡かゞみと睨にら
 め競くらをして頤あごをなでる唐琴屋からことやよ、惣くわて世間一切の善男子ぜんなんし、若わし
 遊あそんで暮くすが御執心ごしやくしんならば、直ただちにお宗旨しゆじを変かへて文学者ぶんがくしやとなれ。
 我わが所いはゆる謂ぶんがくしや文学者ぶんがくしやとはフイヒテが「Ueber《ユーバル》《das
 《Das》 Wesen 《ウエーゼン》 des 《テス》 Gelehrten 《ゲレール

テン》に述べたてし、七むづかしきものにあらず。内新好が

『一目土堤』に穿りし通仕込の御作者様方一連を云ふなれ

ば、其職分の更に重くして且つ尊きは豈に夫の扇子で前額を

鍛へる野幫間の比ならんや。

夫れ文学者を目して預言者なりといふは生野暮一点張の釈

義にして到底咄の出来るやつにあらず。我が通仕込の御作

者様方を尊崇し其利益のいやちこなるを欽仰し、其職

分をもて重く且つ大なりとなすは能く俗物を教え能く俗物

に渴仰せらるゝが故なり、(渠等が通の原則を守りて俗物

を斥罵するにも関らず。)然しながら縦令俗物に渴仰せら

るといへども路傍の道祖神の如く渴仰せらるゝにあらず、

又賞めで喜よろこばるゝと雖いへども親おやの因いん果ぐわが子こに報むくふ片輪娘かたむすめの見世物みせものの如ごとく賞めで喜よろこばるゝの謂いひにあらねば、決きしてく心配しんぱいすべきにあ
 らす。否いな、俗物ぞくぶつの信しん心しんは文学者ぶんがくしや即ち御作者おんさくしや様方さまがたの
 生せい命めいなれば、否いな、俗物ぞくぶつの鑑かん賞しやうを辱かたじけなふするは御作者おんさくしや様
まがた方即ち文学者ぶんがくしやが一期いちごの荣誉えいよなれば、之ひなんを非難ひなんするは畢ひつきやう竟
たうせい当世ぶんがくの文学ぶんがくを知らざる者しといふべし。
このゆゑ此故たうせいに当世ぶんがくしやの文学者ぶんがくしやは口くちに俗物ぞくぶつを斥罵せきばする事すこ頗はなる甚はなだし
 けれど、人じん気きの前まへに枉屈わうくつして其どれい奴隷どれいとなるは少すこしも珍めづらしから
 ず。大入おほいりだ評判ひやうばんだ四版はんだ五版ばんだ傑作けつさくぢや大作たいさくぢや豊ほうね
ん年まんぢや万作まんさくぢやと口上こうじやうに咽喉のどを枯からし木戸きど銭せんを半減はんまけに
 して見みせる縁日えんにちの見世物みせもの同どう様やう、薩摩さつま蠟ろう燭そくてらくと光ひかる色い

ろずりべうしごまくわ 摺表紙に誤魔化して手拭紙てふきがみにもならぬ厄介者やくかいものを売附うりつけるが

斯道しだうの極意ごくい、当世たうせい文学者ぶんがくしゃの心意こころいきぞかし。さりながら人氣じんき

の奴隸どれいとなるも畢ひつきやう竟ひつぎやうは俗物ぞくぶつ濟度さいどといふ殊しゆしやう勝かへつらしき奥おくの

手があれば強あながち無用むようと呼ばよるにあらず、却かへつて之れ中々なかなくの大事だいじ

決けつして等閑なほざりにしがたし。俗人ぞくじんを教をしふる功德くどくの甚深じんしん広くわう大だい

にしてしかも其勢せいりよく力の強盛きやうせい宏偉くわうゐなるは熊肝くまのゐ宝丹ほうたんの

販路はんろ広ひろきをもて知らしる。洞簫どうせうの声こゑは嚙りうりやう唳りうりやうとして蘇子そしの腸はらわたを

断ちぎりたれど終つひにトテンチンツトンの上調子うはでうしあだ仇あだつぽきに如しかず。

カントにひねつた「ダンス」のMiss《ミツス》B.《ブー》A.

《エー》Bae.《べー》瓦斯糸織ぐわすいとおりに綺羅きらを張はる印刷局いんさつきよくの貴レ

婦人デイに到いたるまで随喜渴ずゐきかつがう仰あがせしむる手際てぎは開闢かいびやく以來いらいの大出来おほできな

婦人デイに到いたるまで随喜渴ずゐきかつがう仰あがせしむる手際てぎは開闢かいびやく以來いらいの大出来おほできな

婦人デイに到いたるまで随喜渴ずゐきかつがう仰あがせしむる手際てぎは開闢かいびやく以來いらいの大出来おほできな

婦人デイに到いたるまで随喜渴ずゐきかつがう仰あがせしむる手際てぎは開闢かいびやく以來いらいの大出来おほできな

婦人デイに到いたるまで随喜渴ずゐきかつがう仰あがせしむる手際てぎは開闢かいびやく以來いらいの大出来おほできな

婦人デイに到いたるまで随喜渴ずゐきかつがう仰あがせしむる手際てぎは開闢かいびやく以來いらいの大出来おほできな

婦人デイに到いたるまで随喜渴ずゐきかつがう仰あがせしむる手際てぎは開闢かいびやく以來いらいの大出来おほできな

婦人デイに到いたるまで随喜渴ずゐきかつがう仰あがせしむる手際てぎは開闢かいびやく以來いらいの大出来おほできな

婦人デイに到いたるまで随喜渴ずゐきかつがう仰あがせしむる手際てぎは開闢かいびやく以來いらいの大出来おほできな

婦人デイに到いたるまで随喜渴ずゐきかつがう仰あがせしむる手際てぎは開闢かいびやく以來いらいの大出来おほできな

婦人デイに到いたるまで随喜渴ずゐきかつがう仰あがせしむる手際てぎは開闢かいびやく以來いらいの大出来おほできな

り。聞けば聖書を糧にする道徳家が二十五銭の指環を奮発しての「エンゲージメント」、綾羅錦繡の姫様が玄関番の筆助君にやいのくを極め込んだ果の「エロップメント」、皆之れ小説の功德なりといふ。よしや一斗の「モルヒ子」に死なぬ例ありとも月夜に釜を抜かれぬ工風を廻らし得べしとも、当世小説の功德を授かり少しも其利益を蒙らぬ事會て有るべしや。

冒険譚の行はれし十八世紀には航海の好奇心を焰し、京伝の洒落本流行せし時は勘当帳の紙数増加せしとかや。抑も辻行灯廃れて電気灯の光明赫灼として闇夜なき明治の小説が社会に於ける影響は如何。『戯作』と云

へる檻樓ぼろを脱ぬぎ『文学ぶんがく』といふ冠着かむりけしだけにも其効果かうくわの著いぢるしく大だいなるは知しらる。

英吉利いぎりすは野暮堅やぼがたき真面目まじめ一いつばう方ほうの国くになれば、人にんげん間の元ぐわんらい来らい醜しうあく

悪あくなるにお氣きが附つかれずして、ゾオラたまが偶く々しうあく醜し悪あくのまゝを

写うつせば青筋あをすじ出しして不道德ふだうとく文書ぶんしよなりと罵のり叫しく事わめさりとは野や暮ぼの行いき過すぎ余あまりに業げ々ふしき振舞ふるまひなり。さりながら論語ろんごに唾つ

を吐はきて梅曆むめごよみを六韜りくとう三略さんりやくとする当世たうせいの若檀わかだんな那氣質なかたぎは

其れとは反う対はらにて愈々いよく頼たのもしからず。東とうきやう京きやうの或ある固こ オルソド

執キシカ派ぱ教けうくわい会かいに属ぞくする女ぢよ学がつかう校けうしの教師そがものが曾たり我物語わがものの挿画さしゑに

男なん女にょの凶げうあるを見みて猥褻わいせつ文書ぶんしよなりと飛とんだ感かん違ちがひして炉ろ

中ちうに投なげ込こみしといふ一いツ咄ばなしも近頃ちかごろ笑止せうしの限かぎりなれど、如何ど考かんへ

ても聖書バイブルよりは小説せうせつの方が面白おもしろいには違ちがひなく、教師けうしの眼め
 を窃ぬすんで「よくツてよ」派は小説せうせつに現うつを抜ぬかすは此この頃ごろの女ぢよせ
 生徒いと氣質かたぎなり。例たとへば地ちを打うつ槌つちは外はづる。とも青年せいねん男女なんにょに
 して小説せうせつ読よまぬ者ものなしといふ鑑かん定ていは恐おそらく外はづれツこななるべ
 し。

俗界ぞくかいに於おける小説せうせつの勢せい力りよく斯かくの如ごとく大だいなれば随したがつ小説せうせつ
 家か即すなち今いまの所い謂は文学ぶんがく者しやのチヤホヤせらるゝは人じん気き役やく者しやも
 物ものの数かずならず。此この故ゆゑに腥なまぐき血ちの臭にお失ろせて白おしろ粉いの香か鼻を突つく太
 いへい平みよの御代みよにては小説せうせつ家か即すなち文学ぶんがく者しやの数かず次じ第だい々々に増ぞう加かし、
 鯛たひは花はなは見みぬ里さともあれど、鯡にしん寄よる北ほつ海かいの浜はま辺べ、薯じねん蕷じやう掘ほる九
 州うしゆうの山やま奥おくに到いたるまで石せき版ばん画えと赤あか本ほんは見みざるの地ちなしと

はな 鼻うごめかして ぶんがく の 功德無量 大なるを説く 当世男
 殆んど門並なり。寄れば触れば 高慢の舌爛してヤレ 沙
 翁 は造化の一人子であると 胴羅魔声を 振染り 西鶴は九
 うかうとんび 臯に鳶トロ、を舞ふと飛んだ通を抜かし、 何かにつけては美学
 うけうり の 受売をして 田舎者の 緋メレンスは 鮮かだから美で江戸ツ子
 めくらじま の 盲 縞はジミだから美でないといふ 滅法の大議論に近
 よがつべき 所合壁を騒がす事少しも珍らしからず。 好 奇な 統計家が
 がいさん 概算に依れば 小遣帳に 元禄を拈る 通人 訖算入して凡
 いつちやうない そ 一 町内に百「ダース」を下る事あるまじといふ。
 だいどころ 夫れ 台所に於ける鼠の 勢力の 法外なる 飯焚男が
 ますおと 升落しの 計略も更に 討滅しがたきを思へば、 社会問

題だいに耳傾みかたむくる人いかで此い一町内いちちやうない百「ダース」の文学者ぶんがくしやを
 等閑なほざりにするを得うべき。若し惣すべての文学者ぶんがくしやを驅かつて兵役へいえきに従じゆう
 事じせしめば常備軍じやうびぐんは頓にはかに三さん倍ばいして強兵きやうへいの実忽じたちまち挙あがる
 べく、惣すべての文学者ぶんがくしやに支払しはらふ原稿料げんかうれうを算つもれば一万噸とんの甲鉄かふてつ
 艦かん何艘なんざうかを造つくるに当あたるべく、惣すべての文学者ぶんがくしやが消費せうひする筆墨ひつぼく
 料れうを徴ちやうしゆう収すべすれば慈善病院じぜんびやうるん三ツ四ツを設つくる事決けつして難かたき
 にあらず、惣すべての文学者ぶんがくしやが喰潰くひつぶす米こめと肉にくを蓄積ちくせきすれば百ひやく
 度たび饑饉ききん来きたるとも更さらに恐おそるゝに足たらざるべく、若し又惣すべての文ぶん学がく
 者しやを一いち時に殺戮さつりくすれば其死屍ししは以もつて日本海にっぽんかいを埋うづむべく其
 血ちは以もつて太平洋たいへいようを變色へんしよくせしむべし。
 文学者ぶんがくしやは一いちの社会問題しやくわいもんなり、貧民ひんみんが、僧侶ぼうずが、娼妓しやうぎが

社会問題となれる如く。

熟々考ふるに天に鳶ありて油揚をさらひ地に土鼠ありて

蚯蚓を喰ふ目出度き中に人間は一日あくせくと働きて喰ひか

ぬるが今日此頃の世智辛き生涯なり。学校の卒業証

書が二枚や三枚有つたとて鼻を拭く足にもならねば高が壁の腰

張か屏風の下張が関の山にて、偶々荷厄介にして筆筒

に蔵へば縦令へば虫に喰はるゝとも喰ふ種には少しもならず。学

士ですの何のと云つた処で味噌摺の法を知らずお辞義の礼式に

熟せざれば何処へ行ても敬して遠ざけらるが結局にて未だしも

敬さるゝだけを得にして責めてもの大出来といふべし。ミルトン

は中々以ての外なり。トヴの結局が博物館に乾物の標本

を残すか左なくば路頭の犬の腹を肥すが世に学者としての功
 名手柄なりと愚痴を覆す似而非ナツシ詰りなれど、さるにて
 も笑止なるは世の是沙汰、飯粒に釣らるゝ鮎男がヤレ才子
 ぢや伶俐者ぢやと褒めそやされ、偶さか活きた精神を有つ者
 あれば却て木偶のあしらひせらるゝ事沙汰の限りなり。騙詐が世
 渡り上手で正直が無気力漢、無法が活澆で謹直が
 愚図、泥亀は天に舞ひ鳶は淵に躍る、さりとは不思議づくめの
 世の中ぞかし。
 斯る中にも社会に大勢力を有する文学者どのは平氣の
 平三で行詰りし世を屁とも思はず。春うらく蝶と共に遊ぶや
 花の芳野山に玉の卮を飛ばし、秋は月てらくと漂へる潮を觀

へ^{ゑの}しま^{まつ}の松に猿なきを^{うら}怨み、^{げんとう}嚴冬には炬燵を奢の^{たかやぐら}高櫓と
 と^{どち}こも閉籠り、盛夏には蚊帳を榮耀の陣小屋として、米は俵より^わ涌
 き^{ぜに}銭は^{がまぐち}墓口より出る結構な世の中に何が不足で^{ゆきだふ}行倒れの茶
 や^{やばん}ばんきやうげん番狂言する事かとノンキに^{たいへいらく}太平楽云ふて、^{じさく}自作の小説
 が^{なんじつ}何十遍摺とかの色表紙を^{うりだ}付けて売出され、^{にがうくわつじ}二号活字の広
 わ^{うこく}うこく告で披露さるゝ外は何の慾もなき^{きらく}気楽三昧、^{おひさき}あツたら老先
 の^{なが}長い^{せいねん}青年男女を^{だらく}墮落せしむる事は^{つゆおも}露思はずして^{ふでづひ}筆費え紙
 み^{みづひ}づひ費え、^{たか}高が^{たいか}大家と云はれて^み見たさに^{むやみ}無暗に^{げんかうし}原稿紙を書き^かちら
 しては^{くづや}屑屋に^{ちうぎ}忠義を^{つく}尽すを^{てがら}手柄とは^{こころえ}心得るお目出たき^め商^{しやうばい}売
 なり。^{つきゆきはな}月雪花は^{おろ}魯か^{いぬ}犬が^こ子を^う産んだとては^{いつく}一句を作り^{ねこさかなぬす}猫が^く肴を^す窃
 んだとては^{いつばい}一杯を^の飲み^{なに}何かにつけて^{とほう}途方もなく^{うれ}嬉しが^る事お^か

めが甘酒あまざけに酔よふと全おなじ。

斯かくの如ごとく文学者ぶんがくしやは身分みぶん不相ふさう応おうに勢せい力りよくを有いうし且かつつ身分みぶん不ふ相さう応おう

相さう応おうにのンよきなり。世よに気き楽らくなるものは文学者ぶんがくしやなり、世よに羨せん

ましき者ものは文学者ぶんがくしやなり、接せつ待たいの酒さけを飲のまぬ者ものも文学者ぶんがくしやたら

ん事を欲ほつし、落おちたるを拾ひろはぬ者ものも文学者ぶんがくしやたるを願ねがふべし。

然しかるに世よにすねたる阿呆あほうは痛いたく文学者ぶんがくしやを斥せき罵ばすれども是なかれ中なか

々に識しき見けんの狭け陋ろうを現げん示じせし世迷よまい言ごたるに過すぎず。冷れい静せい

なる社しや会かい的てきの眼めを以もつて見みれば、等ひとしく之これれ土居どきよして土食どしよくす

る一あなツ穴みの蚯み蚓ずの徒ともならば何いづれを高たかしとし何いづれを低ひくしとなさ

ん。濁どぶ膠ろくを引掛ひつける者ひつが大福だいふくを頬張ほ張ばる者をを笑わらひ売ばい色しよくに現うつ

を抜ぬかす者が女房にようぼうにデレる鼻垂はなたらしを嘲あざける、之ひとれ皆はな他の鼻の

穴あなの広ひろきを知しつて我わが尻しりの穴あなの窄せまきを悟さとらざる鳥を澁この白しれ者ものといふ
 べし。窮きゆう理り決けつして迂うなるにあらざ実じつ踐せん何なんぞ浅あさしと云いはんや。
 魚さかな肴なまぐさは生なま臭くさきが故ゆゑに廉やすからず蔬やさい菜さいは土つち臭くさしといへども尊たふとし。
 馬むまに角つのなく鹿しかに※《たてがみ》なく犬いぬにやんなと啼ないてじやれず猫ねこは
 ワンと吠ほえて夜よを守まもらず、然しかれども自おのづから馬まなり鹿しかなり犬いぬなり猫ねこな
 るを妨さまたげず。稼かせぐものあれば遊あそぶ者ものあり覚さめる者ものあれば醉ゑふ者ものあ
 るが即よち世よの实じつ相さうなれば己おのれ一人ひとりが勝かつて出で放ほう題だいをこねつけ
 て好いい子この顔かほをするは云いはふ様やうなき歿わ分から分ず曉や漢ごん言ごとう語だん同どう断だんといふべ
 し。縦た令とひ石いし橋はしを叩たいて理り窟くつを拈ひね頑ぐわん固こ党どうが言ことの如ごとく、文ぶん学がく
 者しやを以もつて放ほう埒らつ遊いう惰たい怠まん慢ち痴はう呆しやく社わい会かいの穀こく潰つぶし太たい平へいの寄きせ
 生い虫ちゆうとなすも、兔とに角かく文ぶん学がく者しやが天てん下かの最さい幸かう最さい福ふくなる者ものた

するに少しも差^さ問^{もん}なし。然^{しか}るを愚^ぐ図^ず々々^{／＼}と賢^{さか}し^らだちて罵^のるは
 隣^{となり}家^かのお菜^{かず}を考^{かんが}へる独^{ひとり}身^{もの}者^{もの}の繰^{くり}言^{ごと}と何^{なん}ぞ扱^{えら}まん。
 しかのみならず、文学^{ぶんがく}者^{しや}を以^{もつ}て怠^{たい}慢^{まん}遊^{いう}惰^だの張^{ちやう}本^{ほん}となすおせツ
 加^{たま}之^{たま}、^{たい}慢^{まん}遊^{いう}惰^だの却^{かへつ}て神^{かみ}の天^{てん}啓^{けい}に協^{かな}ふを知らざる白痴^{たはげ}
 なり。謹^{つし}んで慮^{おも}かるに神^{かみ}の御^み恵^{めぐ}洽^{あま}かりし太^{たい}古^こ創^{さう}造^{ぞう}の時代^{じだい}に
 は人^{にん}間^{げん}無^む為^ゐにして家^か業^{げふ}といふ七^{しち}むづかしきものもなければ稼^{かせ}ぐ
 といふ世^せ話^わもなく面^{おも}白^{しろ}おかしく喰^{くつ}て寝^ねて日^ひ向^{むか}ぼこりしてゐられ
 たものゝ如^{ごと}し。アダム飛^とツ塵^{ちり}が働^{はたら}いて喰^くふといふ面^{めん}倒^{だう}を生^{しやう}じ
 は扱^{さて}も迷^{めい}惑^{わく}千^{せん}万^{ばん}の事^{こと}ならずや。神^{かみ}が創^{さう}造^{ぞう}の御^み心^{こころ}は人^{にん}
 間^んを楽^{たの}ましめんとするにありて苦^{くる}ましめんとするにあらず。無^む
 為^ゐは天^{てん}則^{そく}なり、無^ぶ精^{しやう}は神^{しん}慮^{りよ}に協^{かな}へり。正^{しやう}直^{ちき}の頭^{かう}に神^{かみ}宿^ど

る——嫌いやな思しをして稼かせぐよりは真まツ正しやうぢき直あそに遊あそんで暮くらすが人にんげ
ん間の自然しぜんにして祈いのらずとも神かみや守まもらん。文ぶん学がく者しやを以もつて大だいの
 ンんきなり大だい氣き樂らくなり大だい阿あ呆ほうなりといふ事ことの当たう否ひは兎とも角かくも眼めばか
 りパチクリさして心こころは藻も脱ぬけの売からとなれる木ミ乃イ伊ぶん文がく学しや者しやは豈あに是
 れ人にんげん間の精きつ粹すゐにあらずや。
 且またつ又また聖バイブル経きんの教とくふる処ところに依よれば天てん国こくに行ゆかんとすれば是ぜ非ひと
せうにも小せうに児こころの心こころを有もたざるべからず。小せうに児こころの如ごとくタワイなく、意い氣き地ぢ
 なく、湾わん白ぱくで、ダヴだふをこねて、遊あそび好ずきで、無む法はふで、歿わ分から曉ずやで、
あるとき或ある時ときはお山やまの大たい将しやうとなりて空から威ゐ張はりをし、或ある時ときはデレリ
ぼうぜん茫然ぼうぜんとしてお芋いもの煮にえたも御ご存ぞんじなきお目め出でたき者ものは当たう世せうの文ぶん
んがくしや学がく者しやを置おいて誰たぞや。

文学者なる哉、文学者なる哉。天変地異を笑つて済ますものは文
 学んがくしや者なり。社しゃ会かい人事じんじを茶ちやにして仕舞しまふ者は文学ぶんがくしや者なり。
 否いな、神とくべつの特とくべつ別ひいきなる鼻う頂しぜんを受けて自然しぜんに hypnotize 《ヒプノタ
 イズ》さるものは文学ぶんがくしや者なり。文学者なる哉、文学者なる
 哉。

我さんもんじやれ三文字屋金平きんぴらつと夙ぐせいに救世だいほんぐわんの大おこ本願つひを起いし、終いに一切いの
 善ぜん男なん善ぜん女にをして悉ことごとく文学ぶんがくしや者むまたらしめんと欲ほつし、百かで買かツた
 馬むまの如くのたりにくとして工風くふうを凝こらし、虱しらみを捫みる事一万疋に及び
 し時酒屋さかやの厮童こそうが「キンライ」節ふしを聞きいて豁くわつ然ぜん大悟たいごし、茲こゝに
 椽えんだい大しひのみの椎実筆ふを揮ふるて沓あまねく衆しゆじやう生ための為あに為ぶんがくしや文学ぶんがくしや者せう経せうを説せつ
 解いせんとす。

右から見ても左から見ても文学者は最幸最福なる動物なり。我が
 拔苦与樂のせつばう説法うたがを疑ふ事なく一凶いちづに有ありがたがツて盲信まうしんすれば
 このよごくらく此世からの極樂おうじやうけつ往生かた決して難かたきにあらず。銀価ぎんかの下落げらくを心
んばい配する苦勞性くらうしやう、月給げつきふの減額げんがくに氣きを揉む神經しんけい先生せんせい、若
からだくは身軀くにもてあます食しよくもたれの豚ぶたの子こ、無暗むやみに首くびを掉ふりたがる
はりこ張子の虎とら、来きたつて此説法せつばうを聴ちやうもん聞きし而しかしてのち文学者ぶんがくしやとな
あさめしまへれ。朝飯前あさめしまへの仕事しごとにして天下てんかを驚おどろかす事虎列刺コレラよりも甚はなはだしく
てんか天下てんかに評判ひやうばんさる事蜘蛛男くもをとこよりも隆さかんなるは唯其れ文学者ぶんがくしやあ
 るのみ、文学者あるのみ。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆60 愚」作品社

1987（昭和62）年10月25日第1刷発行

1990（平成2）年6月30日第5刷

底本の親本：「文学者となる法」右文社

1894（明治27）年4月

入力：奥村正明

校正：菅野朋子

2000年8月1日公開

2005年12月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

為文学者経

三文字屋金平

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>